

# 変わる消防大学校



消防大学校長 有岡 宏

設立50余年の歴史を有する消防大学校は、昨年、その前身である消防講習所の時代と通算して卒業生が5万人を超えるに至りました。この間、社会情勢や環境の変化に対応してさまざまな取り組みがなされてきました。最近においても、平成18年度に教育訓練計画の抜本的な見直しを行ったところであり、本年度も、東日本大震災を教訓とした実務講習の充実を図っているところです。

ここで、この四半世紀での変化を見るため、昭和61年度の「幹部研修科」と平成23年度の「幹部科」を比較してみたいと思います（以下、「前者」、「後者」と記します。）。両者には入校資格等に差異がありますが、内容的には多くの共通点が見られます。なお、当時の総合教育課程の代表とも言える「本科」は入校期間が約5か月に及ぶためここでは取り上げません。

まず、入校期間と教育時間は、前者が74日間・381時間、後者は45～50日・220時間となっております。このため、一般教養、消防法制、消防管理といった分野では思い切った科目の絞り込みを行っており、これらの分野では後者の時間数が前者の時間数の半分程度にとどまっております。また、消防運用分野についても3分の1程度の時間数の減少が見られますが、実技訓練を伴う科目についてはむしろ時間数が増加しております。さらに、演習については、前者で設定されていた時間数を維持するだけでなく、新しいメニューを取り入れており、今や本校の教育の重要な柱となっております。

このように、本校ではこれまで、入校をより容易なものとするために入校期間を短縮する一方、求められる教育水準をけっして低下させることのないよう、専門的な科目への重点化や実戦的教育訓練の充実を図っております。言うまでもなく、この過程で、大規模な自然災害や火災、事故等を踏まえ、内容の見直しを行っています。また、効率的かつ効果的な研修のための新たな手法として、e-ラーニングを積極的に導入しています。

さて、この際、消防大学校の教育について気がついたことを2点だけ申し上げたいと思います。その一つは、近年一層高い水準の教育訓練が求められていることです。学生のアンケートでは全般的に積極的な評価をいただいておりますが、「もっと高度な内容にしてほしい」、「時間数を増やしてほしい」といったコメントも相当数あるのは事実です。身の引き締まる思いがします。もう一つは小規模な消防本部からの入校がたいへん少ないことです。4年前の数字にはなりますが、消防吏員数が50名以下の消防本部を見ると、本校への派遣実績のある本部の数は3年間の合計でようやく22%という状況です。人員や財政面での課題があるとは言え、将来のマンパワーの充実ということを考慮し、思い切った対応がなされることを切に望んでおります。

新年度に入り、本校で学ぶ学生のはつらつとした表情を見て、消防大学校もさらに変わっていく必要があると、強く感じた次第です。